



土産

神主・奈良県立大学客員教授

岡本彰夫

Akio OKAMOTO



おかもと・あきお | 1954 (昭和29)年奈良県生まれ。國學院大學文学部神道科卒業後、春日大社に奉職、春日大社権宮司(2015年退職)。奈良県立大学客員教授、宇賀志屋文庫庫長。著書に『大和古物散策』『大和古物漫遊』『大和古物拾遺』(ペリカン社)、『神様にほめられる生き方』(幻冬舎)、『神様が持たせてくれた弁当箱』(幻冬舎)、『大和のたからもの』(淡交社)など多数。

幕末の大和の名産品に目を向けて見る。

嘉永(1848~54)増補改正『大和国細見図』は大和一国の大地図であるが、旅人の便宜のためか、うまく折りたためるように工夫されている。その中の囲み記事に、「国中名産略記」があつて、国内産物の一覧が掲げられている。

先ずそれを列記してみると、・晒布・團扇・大和柿・酒(露酒其外品々)・墨・春日盆・土器(春日神供^三モチユ)・具足・十文字稽古鎗・煉革・鞍・刀・筆・春日藤(組織モジ織ノ如シ)・石墨・禹余糧(俗ニスズ石ト云)・石燈籠・木燈籠・鼓革・土風炉・煉鹿・奈良人形・鹿角細工・換掌牋(手シホ)・居伝坊(春日祭事ニ用ル茶菓子)・火打焼・糟漬瓜(俗ニ奈良漬ト云)・櫟実・春日野味噌・蕨餅・金剛草履・足袋

—— 以上奈良

・土作狗(法花華寺)・豊心丹(西大寺)・茶笏(高山村)・素麵(三輪)・香砂丸(七条村)・保童丸(今井町)・鯖鮓(宇陀紙)・カタクリ粉・菓種(宇陀吉野)・葛・漆・塗物・桧笠・竹絲籃・蜂蜜・榧・煙草・紙類(国栖紙)・材木・椎茸・陀羅尼助・葛菓子・青苔^{あわさ}・熊皮・釣瓶鮓(下市)・鮎煎餅(六田)

〔二部文言省略〕

判明し難い物産もあるが、少し説明を加えておく。

晒布は奈良晒^{ちよま}、苧麻を用いたが、織り上がりの布を生平^{きびら}と呼んで、亜麻色となる。これを木灰^{きばい}(櫟^{くわい}灰)と水で、白く晒す方法をあみ出したのが奈良晒である。酒は奈良の諸白^{もろはく}が江戸前期には名だたる銘酒で、將軍家御膳酒として江戸に迄

送られていたという歴史をもつ。団扇は禰宜団扇ともいい、かつて春日の下級神職の内職として、渋団扇であつたが、江戸後期には美しい透かし団扇となつた。柿は大和の御所柿が、突然変異の甘柿で当時屈指の名物であつた。珍らしいのは春日盆と土器である。そもそも春日社で用いられる神前の供饌具はほとんど漆器で、その形も特有の優美な品々が多い。20年毎の造替^{ぞうたい}に合わせ新調される。お膳類は長方形の隅入木瓜型^{たちからほん}、手力盆^{たぢからほん}は末社・手力雄神社にのみ用いる品で黒漆塗り、表面は朱漆で底部に蜻蛉と蝶の螺鈿が施されている。この螺鈿の無い盆を末社盆と呼び、山内八十余所と称される末社に御供を献ずる際に用いる。まさかこれら神器が、一般に売買される筈も無い。ならばどのような品が売買

されていたのであろうか。折々散見する品は、全て樺製の木地物で、ある時脚の横に「春日十六人大工何某造」の署名を見つけて、ハタと膝を打った。春日社造替に奉仕する大工は、総大工大和守を筆頭に、本殿四殿若宮一殿、都合五殿に棟梁3人、つづを充て、都合16人を春日座の大工と呼び、世上これを春日の十六人大工と呼んだ。神器の漆器の木地は皆十六人大工の製作にかかるとのだ。これらを総合して考えると、十六人大工が内職として樺で製作し、名物として春日盆の名のもとに販売していたのであろうと思われるのだ。

加えて春日神事に用ゆる土器は、「春日日並かすがひなび御供坏手号所こくついでうしよ」で製作される。幕末には春日の下級神職がこの任に当たり境内の土を採って焼成したが、かつては奈良町の中にもこれらの家があつて、過年この家跡が発掘されて、未使用の土器が大量に発掘され、奈良市の考古担当者から質問を受けたが、やはりこれとて、お目こぼしを以て、春日土器の名のもとに、神棚で使う品々を地元や旅の人々に販売していたことが判明する。

撮影：岡下 浩二

大和国細見図（嘉永版）



国中名産略記



春日土器（発掘品）



鹿角細工（明治～戦前）



春日盆（春日御水茶屋火打焼用）

